

坂 堤 2

—一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査3—

2011

福岡市教育委員会

坂 堤 2

—一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査3—



調査番号 0904 遺跡番号 SKT-2

2011

福岡市教育委員会

卷頭図版



坂堤遺跡第2次調査出土滑石製容器蓋

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、一般国道3号博多バイパス建設に伴い、平成21年4月から6月にかけて発掘調査を実施した東区坂堤遺跡の第2次調査の成果を報告するものです。遺跡のある香椎地区は福岡市東部の副都心として発展する一方、万葉集や記紀の伝承の舞台としても広く知られています。坂堤遺跡の調査で得られた成果は、香椎地区の歴史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、福岡国道事務所、地元町内会を始めとする関係者の方々とのご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

- 1 本書は福岡市教育委員会が一般国道3号博多バイパス建設に伴い、福岡市東区香椎駅東一丁目地内で発掘調査を実施した坂堤遺跡第2次調査の報告である。
- 1 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
0904	SKT-2	660m ²	536m ²	2009年4月16日～7月15日

- 1 本書に掲載した遺構の写真撮影は佐藤一郎（埋蔵文化財第2課主任文化財主事）が行い、実測は佐藤の他、立石真二・藤野雅基（同課技能員）が行った。
- 1 遺物の写真撮影は佐藤、実測・製図は土器・石製品を佐藤、石器・木製品は立石が行った。
- 1 遺物の整理は整理作業員の平井宏美・古賀美江・泉川信子・執行恭子が行った。
- 1 本書に用いた方位は座標北である。
- 1 遺構は2桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSD（河川・溝等）、SX（水利施設等）の略号を番号の前につけた。
- 1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本文目次

I はじめに	5
1 調査に至る経緯	5
2 調査の組織	7
II 遺跡の位置と周辺の歴史環境	7
1 遺跡の位置	7
2 周辺の歴史環境	9
III 調査の記録	11
1 調査の概要	11
(1) 試掘調査	11
(2) 調査の経過	11
2 遺構と遺物	11
(1) 調査区の土層	13
(2) S D O 1 旧河川と関連遺構	13
IV 調査のまとめ	21

挿図目次

第1図 坂堤遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/50000）	6
第2図 坂堤遺跡周辺図（縮尺 1/5000）	8
第3図 坂堤遺跡第2次調査発掘地（縮尺 1/500）	10
第4図 調査区土層図（縮尺 1/60）	12
第5図 調査配置全体図（縮尺 1/150）	14
第6図 出土土器・石器実測図（縮尺 1/3）	16
第7図 出土石製品実測図（縮尺 1/3）	17
第8図 出土木製品実測図（1）（縮尺 1/3・1/6）	18
第9図 杭列・水口状遺構実測図（縮尺 1/40）	19
第10図 出土木製品実測図（2）（縮尺 1/3）	20

図版目次

巻頭図版 坂堤遺跡第2次調査出土滑石製容器蓋

- | | | |
|------|------------------|------------------|
| 図版 1 | 1 調査区北西全景（北東から） | 2 調査区中央全景（北東から） |
| 図版 2 | 1 調査区南東全景（北東から） | 2 SX02（東から） |
| 図版 3 | 1 SX02 木杭 1（南から） | 2 SX02 木杭（南から） |
| | 3 SX02 木杭 3（南から） | 4 SX02 木杭 4（南から） |
| 図版 4 | 1 SX03（南から） | 2 SX03 木杭 1（南から） |
| | 3 SX03 木杭 2（南から） | |
| 図版 5 | 香椎地区空中写真 | |
| 図版 6 | 出土遺物（1） | |
| 図版 7 | 出土遺物（2） | |
| 図版 8 | 出土遺物（3） | |

I はじめに

1 調査に至る経緯

一般国道3号は、北九州市を起点とし、福岡市、久留米市、熊本県を経由して、鹿児島に至る426.4kmの路線である。福岡市においては、市東部地域と中心部の中央区や博多区を結ぶ重要な路線であるため、一日当たりの交通量は6万8千台～7万5千台と集中し、慢性的な交通渋滞をもたらしている。国道周辺を含めた交通混雑の緩和、流通センター、空港、港への効率的な物流活動の支援、都市基盤整備が進められている香椎地区の総合的な交通体系の構築などへ効果を期すべく、東区下原から二又瀬に至る延長7.7km、幅員30～32mの一般国道博多バイパスが事業化された。そのうち現在までに二又瀬交差点から多々良中西交差点までの南側3～5工区4.44kmが供用となり、北側の下原までの2工区3.28kmが残った。

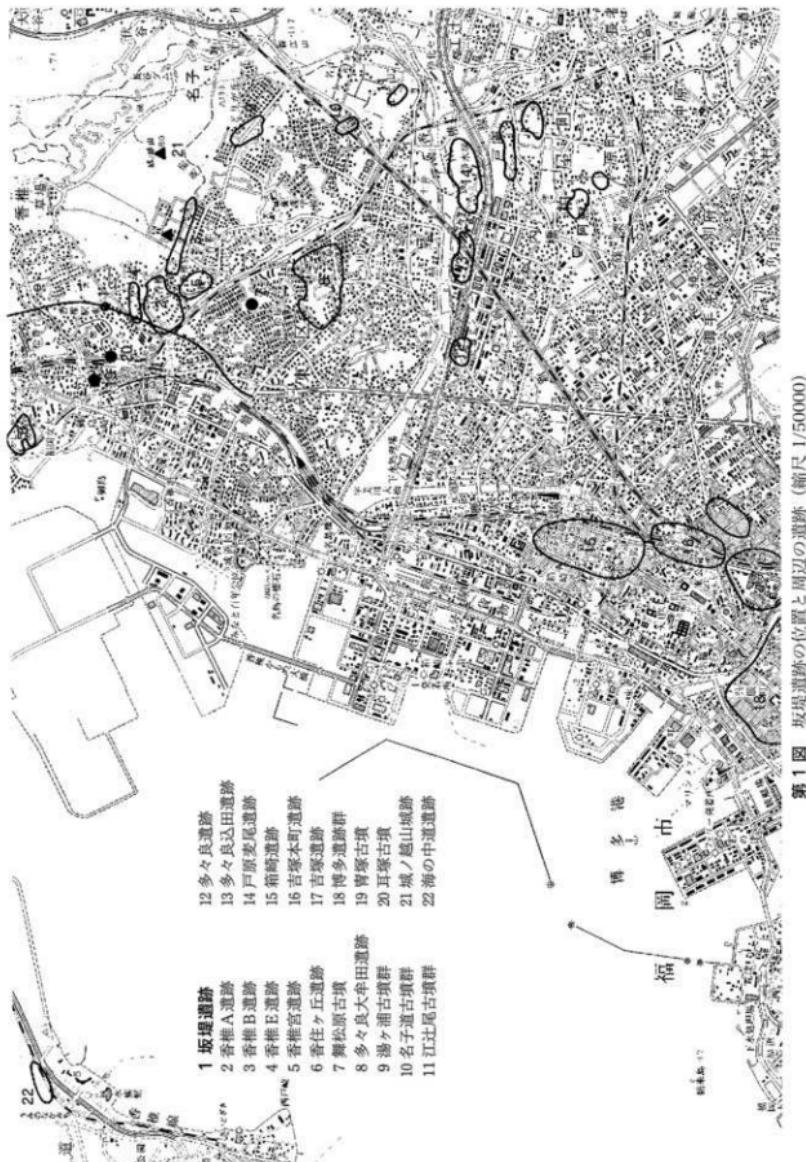
平成3年10月、建設省（現国土交通省）九州地方建設局（現整備局）福岡国道事務所から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対し、2工区のうち多々良中西交差点から香椎二丁目に至る路線内の埋蔵文化財事前審査依頼（事前審査番号3-1-143）があった。現在のJR千早駅の東からJR香椎線に至る狹隘な丘陵部で、埋蔵文化財包蔵地には含まれてはおらず、踏査においても遺跡の存在は認められなかつた。

さらに北側の香椎二丁目の路線内の周知の埋蔵文化財包蔵地（香椎A遺跡、香椎E遺跡）については両者で協議を行っていたが、平成17年4月に国道事務所から事前審査依頼（17-1-2）があり、8月と9月に、埋蔵文化財課がバックホーによる試掘調査を行った。その結果、香椎A遺跡内ではこれまでの周辺の調査成果と同様に中世を中心とした遺構が広く展開していることが確認された。香椎E遺跡内は厚く盛土が行われ、大型のバックホーは進入できず、遺構の確認はできなかつた。これを受けて、香椎A遺跡は発掘調査が必要、香椎E遺跡については再試掘調査が必要と回答した。

平成19年3月に香椎二丁目から北側終点の下原に至る事前審査依頼（19-1-1）が国道事務所から提出され、埋蔵文化財第1課では4月に、香椎駅東一丁目と三丁目で試掘調査を実施した。いずれも丘陵にはさまれた谷部に立地し、埋蔵文化財包蔵地外であった。そのうち一丁目の一部では7世紀の遺物が大量に出土し、坂堤遺跡として埋蔵文化財包蔵地に新規登録された。

2工区内では香椎A遺跡、坂堤遺跡が発掘調査の対象となり、埋蔵文化財第1課は国道事務所と2遺跡について協議を重ねた結果、平成19年度から発掘調査を行うこととなつた。平成19年7月発掘調査委託契約を締結し、同月には坂堤遺跡第1次調査に入った。10月からは香椎A遺跡の調査に入り、平成22年度まで継続して調査が行われた。

坂堤遺跡の路線内の発掘調査も引き続き、平成20年8月に行われた第1次調査南側対象地の試掘調査の結果を受けて、平成21年度初めに第2次調査を実施することとなつた。



第1図 坂堤遺跡の位置と周辺の遺跡 (縮尺 1/50000)

2 調査の組織

発掘調査委託

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

発掘調査受託

福岡市

発掘調査（平成21年度）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

課長 濱石 哲也

調査係長 米倉 秀紀

発掘調査 佐藤 一郎（主任文化財主事）

事前審査係長 宮井 善朗

阿部 泰之（文化財主事）

資料整理（平成22年度）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

課長 田中 淳夫

第1係長 米倉 秀紀

資料整理 佐藤 一郎（主任文化財主事）

試掘調査は平成20年に埋蔵文化財第1課事前審査係長 吉留秀敏、同係文化財主事 星野恵美（前任）が行つた。

調査・整理の庶務は文化財部管理課管理係（平成21年度）・埋蔵文化財第1課管理係（平成22年度）の井上幸江が行つた。

また、福岡国道事務所、地元香椎駅東一丁目町内、発掘作業員、整理作業員の方々のご協力により、坂堤遺跡第2次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

II 遺跡の位置と周辺の歴史環境

1 遺跡の位置

福岡市を中心広がる広義の福岡平野は、東と南を三郡・脊振山地に囲まれ、北に突き出た山塊丘陵によって東から順に柏屋、福岡、早良の平野を形成している。坂堤遺跡が所在する香椎は、柏屋平野の東北端、立花山（367m）西麓、博多湾を抱く陸繫砂州の海の中道の基部に位置し、西は博多湾内の埋め立てにより跡形もないが香椎潟を臨み、東は立花・三郡山塊に連なり、南は飯塚市に源を発する多々良川が流れる。多々良川は宇美川などと合流、名島海岸で博多湾に注ぐ。

香椎は福岡市東区の中央部に位置し、国道3号など幹線道路やJR鹿児島本線など鉄道が交差する交通の要衝で、東は柏屋郡久山町、西は博多湾、南は千早、北は下原に接する。住宅地が広く展開し、千早とともに福岡市東部の副都心と呼ばれている。

坂堤遺跡は福岡市東区香椎駅東1丁目地内に所在し、三郡山系から西に延びる第三紀層からなる低丘陵にはさまれた谷部に立地している。頁岩や砂岩など加工し易い石材が露頭、散乱している。それに加え、三郡山地北部の犬鳴山から若杉山にかけては三郡変成岩帯にあたり緑泥岩や蛇紋岩が多い。蛇紋岩の周辺にはさらに加工が容易な滑石が見られ、数ヶ所で露頭が確認されている。柏屋郡篠栗町には昭和の初めまでタルク工場があり、滑石の産地として知られていた。



第2図 坂堤遺跡周辺図（縮尺 1/5000）

2 周辺の歴史環境

香椎の歴史を述べていくと、古代では必然的に香椎宮を中心としたものとなる。

香椎宮の祭神は仲哀天皇・神功皇后で、応神天皇・住吉大神を配祀している。創建の時期は八幡宇佐宮御託宣集などによると、神亀元年（724）とされる。

『万葉集』卷6には、神亀5年（728）11月に大宰府長官帥大伴旅人、次官大式小野老ら大宰府の官人たちが「香椎廟」に参拝し、香椎潟の景勝を愛でて詠じた歌が収められている。

いざ兒等 香椎の潟に 白妙の 袖さへ濡れて 朝菜摘みてむ 帥 大伴卿

時つ風吹くべくなりぬ香椎潟 潤干の浦に 玉藻刈りてな 大式 小野老 朝臣

往き還り 常にわが見し 香椎潟 明日ゆ後には 見むよしもなし 豊前守宇努首男人

『万葉集』以降の和歌を類題別にまとめた延慶2年（1309）ごろ成立の『夫木和歌抄』にも、香椎潟を詠んだ歌が数首収められている。

かしひ潟 夕露かくれ 泣ぎくれば あへのしまわに 千鳥しばなく 小侍從

現在は度重なる博多湾の埋め立てによって見る影もないが、当時は香椎潟が眼前にひろがり、先には志賀島、それに連なる海の中道を臨む。その砂丘上に位置する海の中道遺跡の発掘調査では漁村集落遺跡で通有な製塙土器・鍾・釣り針などの漁撈具、魚骨・貝類に加え、越州窯系青磁、銅帯、皇朝十二錢の内4種8枚〔万年通宝（鑄造760年）1枚、承和昌宝（835年）1枚、貞觀永宝（870年）1枚、延喜通宝（907年）5枚〕など官衙で多く見られる遺物が出土しており、大宰府の出先機関「津の御厨」との関連が指摘されている。『万葉集』では、香椎潟に加え、日常的に塩を焼き、志賀の浦で漁を行っていた「志賀の海人」が多く詠まれている。

『日本書紀』卷八 仲哀天皇 9年2月条には、熊襲平定の際に行宮「樅日宮」が置かれ、仲哀天皇が新羅征討の神託にそむいたためにその行宮で亡くなつたこと、『日本書紀』卷九 摳政前紀には、神功皇后が新羅出征に先立ち、「樅日浦」の海水で髪をすすぎ、みずらに結ったことが記されている。

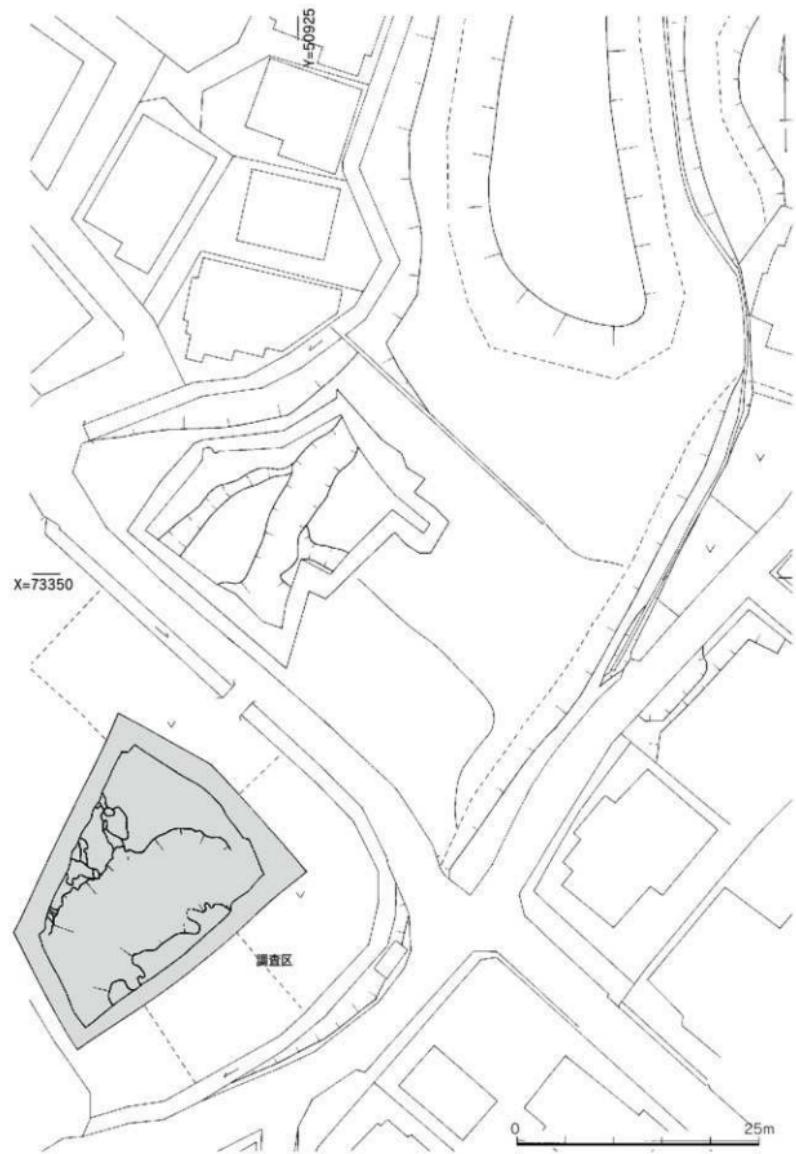
『続日本紀』には、天平9年（737）4月に朝廷の使を伊勢神宮・大神神社・筑紫の住吉神社・八幡神社の二社に加え、「香椎宮」に遣わして幣帛を奉じ、新羅の無礼を報告した記事が見える。

創建当初、朝廷の祭祀は対新羅外交に関するものが多く見られたが、天皇の即位や国内兵乱などに際しても勅使が差遣されるようになった。

承平年間（931-938）成立の百科事典『和名類聚抄』所載の柏屋郡九郷の一つ香椎郷は、現存する地名から香椎に比定されている。万葉仮名での訓は「加須比」とあてられている。郡名の柏屋が「加須也」と記されることから、語源を同じくするのであろうか。

香椎宮は『延喜式』〔延長5年（927）完成〕神名帳にその名が見えず、式部省上に「樅日廟宮舎人」、民部省下に「香椎宮守戸一烟」とあるので、神社と山陵の取り扱いをかねていたようである。

平安時代前期には他の神社とは別格の扱いを受けていたが、やがて大宮司職が任命され、一般の神社と同様の性格をもつようになった。保延6年（1140）香椎宮神人らが大宰府と争い、香椎宮・菖崎宮は大宰府の管轄下に置かれ、府領となつた。仁安元年（1166）平頼盛が大宰大式に赴任すると香椎宮は頼盛の家領となるが、頼盛の死後、建久8年（1190）より長らく石清水八幡宮の管轄下におかれる。蒙古襲来に際して、豊後守護大友頼泰が異国警護番役として香椎・多々良を担当したこと契機に、戦国期に至るまで大友氏の支配を受けるようになる。



第3図 坂堤遺跡第2次調査発掘地（縮尺 1/500）

III 調査の記録

1 調査の概要

(1) 試掘調査

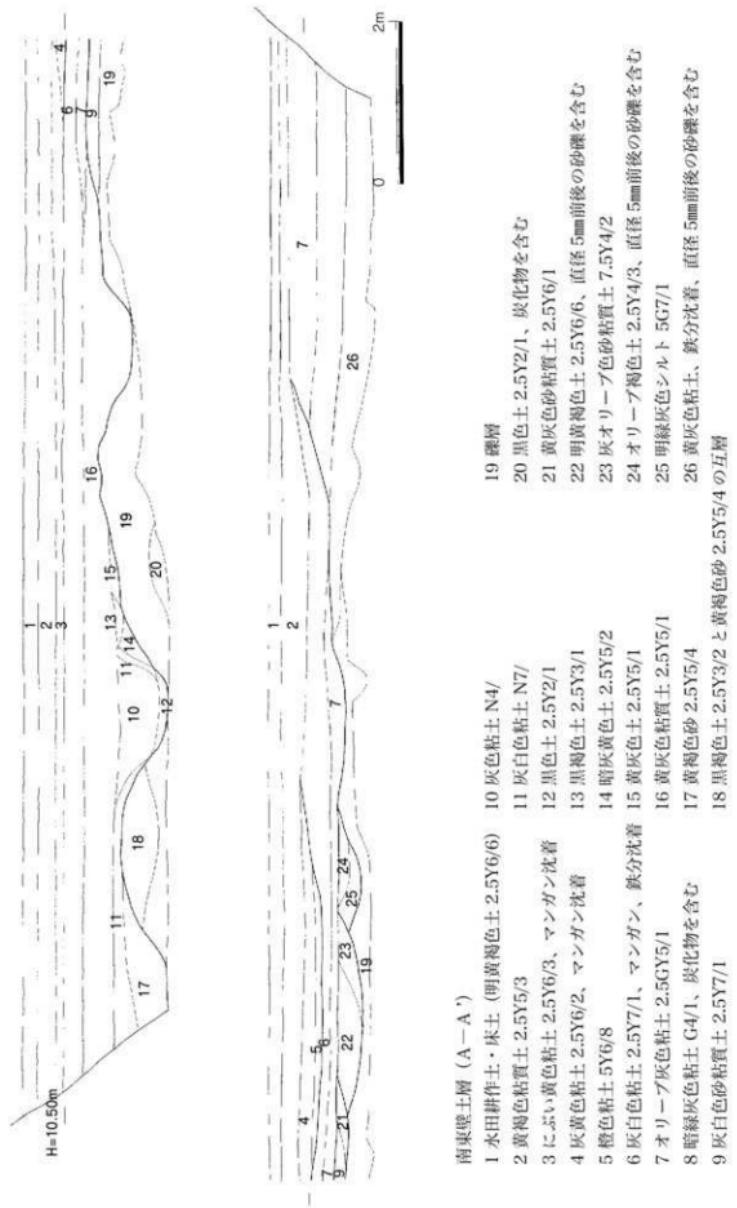
坂堤遺跡は、平成19年4月の博多バイパス路線内試掘調査で初めて確認され、同年7月から9月まで第1次発掘調査が行われた。平成20年8月に引き続き行われた路線内試掘調査は、第1次調査南側の谷部と丘陵裾部に位置する畑地が対象地で、遺構は谷部で確認された。報告によると、谷部北東に縦列で試掘トレント1～3、南西の西端にトレント4を設定し、遺構の有無を確認した。北端近くのトレント1では、地表下1.6mまで盛土、その下に灰黒色土（旧水田耕作土）、黄褐色粘質土（床土）が堆積し、その下の地表下1.8mで基盤の黄灰色粘質土、その上面でピット状の遺構が確認された。その南東のトレント3の状況も同じで、地表下1.9mで基盤が確認されている。東端のトレント2では台地の立ち上がりが確認されたが、遺構は検出されなかった。南端のトレント4では、地表下1.5mでやや青みを帯びた黒色土、1.8mで灰黄色土、2.2mで灰色・黄褐色粘質土、2.4mで灰色粘土が確認されたが、基盤までは確認できず、粘土や砂礫の状況から谷部であるとされた。

(2) 調査の経過

発掘調査はユニットハウスや電気・水道などの条件が整った平成21年4月16日から開始された。バックホーによる表土剥ぎは、対象地が水田に客土で厚くかさ上げされ遺構包含層上面まで2m前後の深さであるため、残土処理の関係から北西と南東部分に分割して行わざるを得なかった。最初に北西部分から着手、20日に表土剥ぎが終了した。22日から作業員を投入、遺構面を清掃し、谷部の南側へ向かって堆積している遺物包含層の掘り下げを開始した。包含層からは須恵器壺・甕片が数点出土するぐらいで、遺物量は少ない。27日には粗成形した滑石製容器蓋の粗製品が出土した。5月に入り、引き続き谷部田河川SD01を掘り下げ。12日には包含層はほぼ掘り上がり、落ち際に堆積した礫層を除去、落ちの岩盤（頁岩～風化頁岩）を追う。西端では杭列を検出した。19日に礫層も掘り上がり、20日に北西調査区の写真撮影、21日に水準高測量、26日に杭打ち、27・28日に遺構実測を行った。杭列の写真撮影の後、個々の木杭の先端出し、補足実測、取り上げを行った。6月1日～3日には残り南東部分の表土剥ぎを行ったが、残り部分の土量が多くもう一過程の表土剥ぎが必要となった。4日から流路跡掘り下げ、9日に中央調査区の写真撮影、11・12日に遺構実測を行った。雨期に入り、降雨により壁面がたびたび崩落し、実測作業と平行して西壁の崩落部分の復旧も行った。18日に中央調査区を埋め戻し、19日にさらにその東南側の表土剥ぎに着手した。23日から遺構掘り下げを開始したが、午後からの雨により夕方には調査区西壁が崩落した。25日に崩落箇所の復旧、壁面・遺構面清掃を行い、翌26日に南東調査区の写真撮影を行った。降雨により作業は滞り、29日・7月2日に土層断面図実測、6日に遺構実測、7日に土層断面補足実測を行い、最終調査区の埋め戻しは10日～14日に行った。14日に借上げ器材返却、15日に器材撤収で、坂堤遺跡第2次調査は終了した。

2 遺構と遺物

以下検出した遺構と出土した遺物について報告する。



第4図 調査区土層図 (縮尺 1/60)

(1) 調査区の土層（第4図）

南東壁面の土層が、調査区の北東から南端に蛇行する古河川SD01と岸の関係を明確に示していることから、堆積状況について述べていく。

土色名・マンセル記号の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に掲っている。

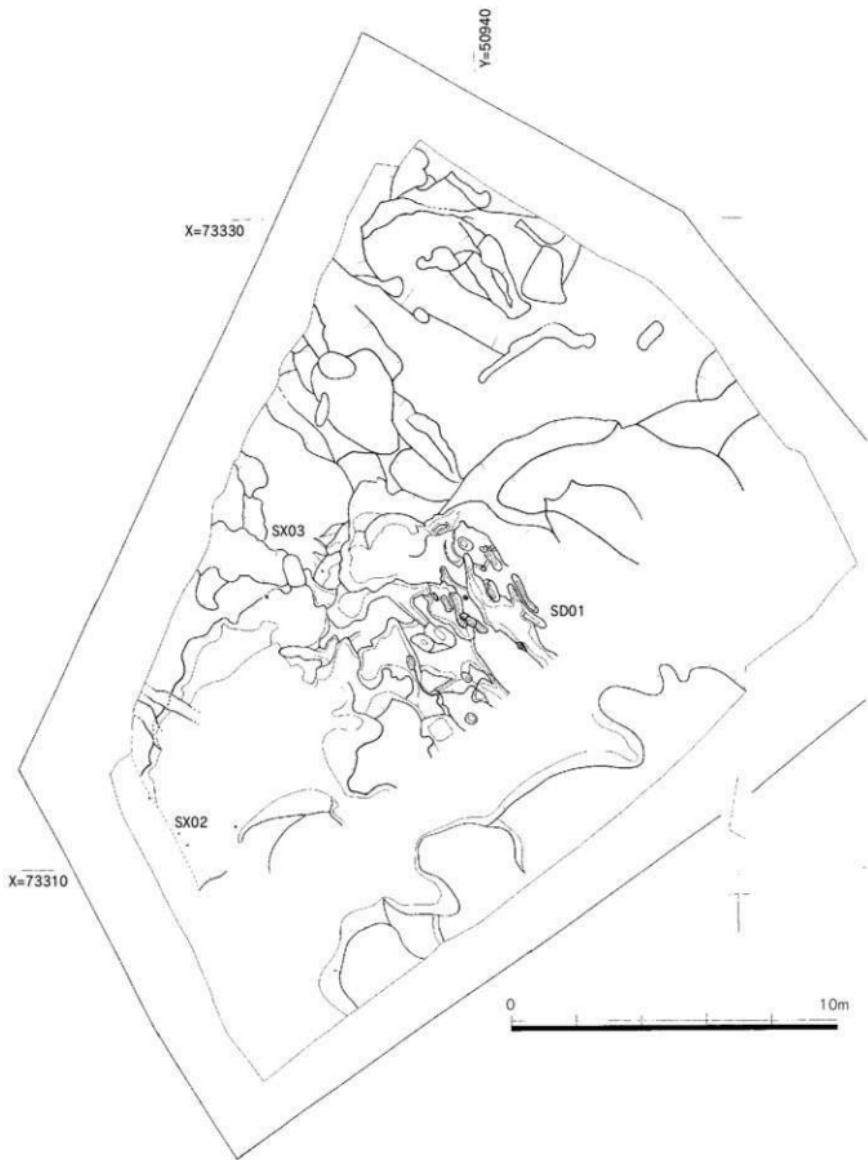
- ① (1層) 地表から深さ1.5m、厚さ20cm前後の水田耕作土・床土 (明黄褐色土 2.5Y6/6)。
- ② (2層) ①の下の厚さ20～30cmの黄褐色粘質土 2.5Y5/3。
- ③ (3層) ②の下、北半部に堆積している厚さ10cmのにぶい黄色粘土 2.5Y6/3、マンガンが沈着している。
- ④ (4・5層) 南側の壁面にかかる旧河川SD01上面の崖みに堆積した層。
(4層) ②の下の厚さ15～20cmの灰黄色粘土 2.5Y6/2、マンガンが沈着している。
- ⑤ (6・7・9層) 南側の壁面にかかる旧河川SD01に堆積した層。
(6層) 2・5層の下の最大厚さ40cmの灰白色粘土 2.5Y7/1、マンガン、鉄分が沈着している。
(7層) 6層の下の厚さ15cmのオリーブ灰色粘土 2.5GY5/1。
(9層) 7・8層の下の厚さ15cmの灰白色砂粘質土 2.5Y7/1。
- ⑥ (8・10～16層) 北側の壁面にかかる旧河川SD01に堆積した層。
(8層) 6・7層の下の厚さ35～60cmの暗緑灰色粘土 G4/1、炭化物を含む。
- ⑦ (10～16層) 8層の下の幅2.7m、深さ0.6mの旧河川の堆積。
(10層) 灰色粘土 N4/、(11層) 灰白色粘土 N7/、(12層) 黒色土 2.5Y2/1、(13層) 黒褐色土 2.5Y3/1、(14層) 暗灰黄色土 2.5Y5/2、(15層) 黄灰色土 2.5Y5/1、(16層) 黄灰色粘土 2.5Y5/1。
- ⑧ (17～20層) ⑦に切り込まれている旧河川下層の堆積。
(17層) 黄褐色砂 2.5Y5/4、(18層) 黑褐色土 2.5Y3/2と黄褐色砂 2.5Y5/4の互層、(19層) 砕屑層、(20層) 黑色土 2.5Y2/1、炭化物を含む。
- ⑨ (21～25層) 7層の下、川岸側の礫層19層上面崖みに堆積した層。
(21層) 黄灰色砂粘質土 2.5Y6/1、(22層) 明黄褐色土 2.5Y6/6、直径5mm前後の砂礫を含む、
(23層) 灰オリーブ色砂粘質土 7.5Y4/2、(24層) オリーブ褐色土 2.5Y4/3、直径5mm前後の砂礫を含む、(25層) 明緑灰色シルト 5G7/1。
- ⑩ (26層) 6・7層の下、基盤の頁岩～風化頁岩の上の堆積。黄灰色粘土、鉄分沈着、直径5mm前後の砂礫を含む。

(2) SD01旧河川と関連遺構

調査区の大半を占める旧河川SD01とそれに付随する杭列SX02、水口状遺構SX03について述べる。

S D 0 1 (第5図)

調査区の北東から南端に蛇行する古河川である。完掘した河川の形態は、北東部で川幅8m前後、深さ0.3mを測る。川底には第三紀層の岩盤（青灰色～白色）が露頭している。北東から南西方向へ向かっていた流路は、調査区中央で南へ振れ、南西壁～南端へ向かう。南西部でも川幅8mは前後、深さ0.4mを測る。中央西岸では水口状遺構が検出された。南西端では、北西から南東に流れる幅0.5m前後、深さ5cmの流路が2条、調査区内で延長2m検出され、南西壁面に沿って杭列SX02が検出さ



第5図 調査配置全体図（縮尺 1/150）

れた。北東での河底の標高9.3m、中央で9.2m、南西で9.0mを測り、調査区内で25m検出、川底の比高差は0.3mを測る。

出土遺物（第6～8図）

須恵器

杯蓋（1・2・6～8）1・2はかえりをもたない杯蓋で、1はやや平坦な天井部から口縁部が直立気味にのびている。2は丸みをもった天井部から口縁部が外傾し、端部はさらに外傾している。

6～8はかえりをもつ杯蓋で、6にはつまみがついていたが欠失している。7・8については天井部中心の部位まで残存していないため、つまみの有無は不明である。6のかえりは直立気味、天井部は低く扁平である。器周1/3残存からの復元口径9.6cmの小型品である。7の天井部はやや高く、天井部1/3からの復元口径は12.0cmを測る。8のかえりは短く、口縁端部がかえりとほぼ同じ面をなす。焼成はあくまで瓦質である。

杯（3～5・9）3～5は受け部をもつ杯で、3・4は小さい受部から立ち上がり部が短く内傾している。体部は深く、底部は平底気味である。3は器周1/4からの復元口径10.5cm、器高3.4cm、4は器周1/3からの復元口径10.5cm、器高3.4cmを測る。5は受け部が小さいが、わずかに内傾する立ち上がり部は比較的高い。器周1/4からの復元口径11.6cm、器高4.0cmを測る。9は受け部をもたない杯で、体部と底部の境が丸みをもち、体部から口縁端部にかけては薄手につくられる。器周1/3からの復元口径12.0cmを測る。

すり鉢（10）底部が決失しているが、すり鉢の上半部とみられる。外傾する口縁部が直線的に延び、口縁部下に凹線をめぐらせる。残存する部位はすべて回転横ナデで仕上げられる。器周1/4からの復元口径9.0cmを測る。

短頸壺（11）扁球形の胴部から直立する頸部が延び、口縁部はわずかに内湾する。器周1/3からの復元口径9.0cmを測る。

壺（12・13）12は口頸部が外上方に延び、口縁端部は内面に短く突出し、平坦面はやや外傾、外面はやや丸みをもって外傾し、直下に型引きによる断面三角の突帯、その下にヘラによる波状文をめぐらせる。13は口頸部が外反して延び、口縁端部下の内面をくぼませ、外面は断面三角に突出し玉縁状をなす。胴部は縱方向の平行叩きの後、カキ目を施すが、器表が摩滅しているために不明瞭である。頸部の下位に工具痕が飛鉋状に斜めに連続してめぐる。

土師器

盤（14）半球形の盤で、体部内面の中位で突出し肥厚し、口縁端部は細くおさめられやや内傾する。口縁部から体部上半にかけては内外面とも横方向のヘラ磨き、体部下半内面はジグザクにヘラ磨き、外面は手持ちヘラ削りを施す。胎土には細かい砂粒を多量に含み、橙色を呈する。器周1/2弱からの復元口径12.0cm、器高4.6cmを測る。

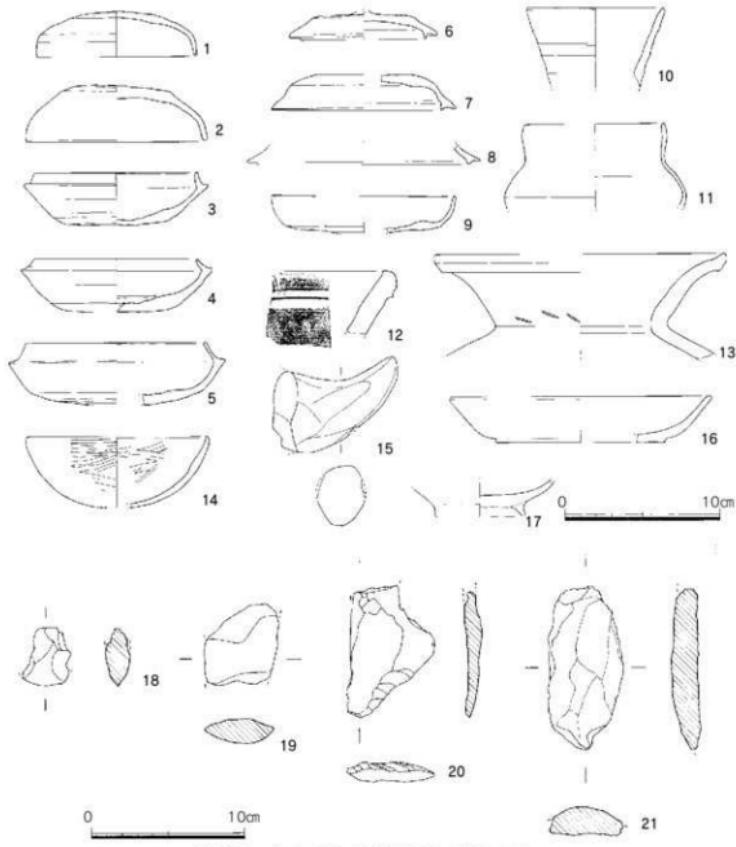
瓶（15）瓶もしくは甕の把手で、断面円形を呈する。

石製品

磨製石斧（18・19・21）18・19は滑石製で、刃部の一部の18は、残存する長さ3.7cm、幅3.0cm、厚さ1.6cm、19は残存する長さ5.2cm、幅4.8cm、厚さ1.6cmを測る。21は堆積岩とみられ、残存する長さ10.7cm、幅5.0cm、厚さ1.9cmを測る。

糸巻形石器（20）滑石片岩製で、扁平な分離形石器の抉りの一部が残る。残存する長さ8.6cm、幅5.6cm、厚さ1.3cmを測る。

木製品（1～8）1は槽で、残存長120cm、幅15cmを測る。2は容器で残存長17cm、幅4.5cmを



第6図 出土土器・石器実測図（縮尺1/3）

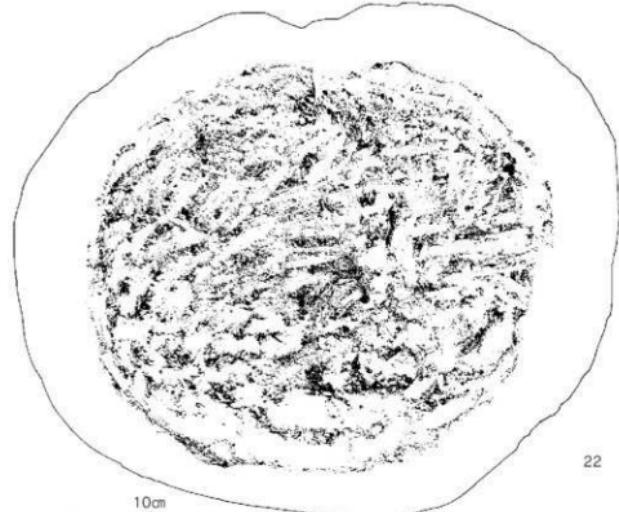
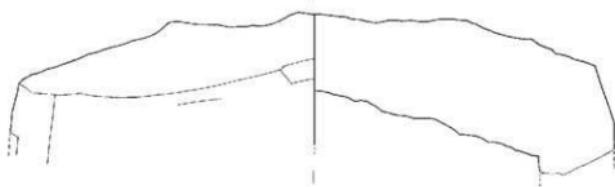
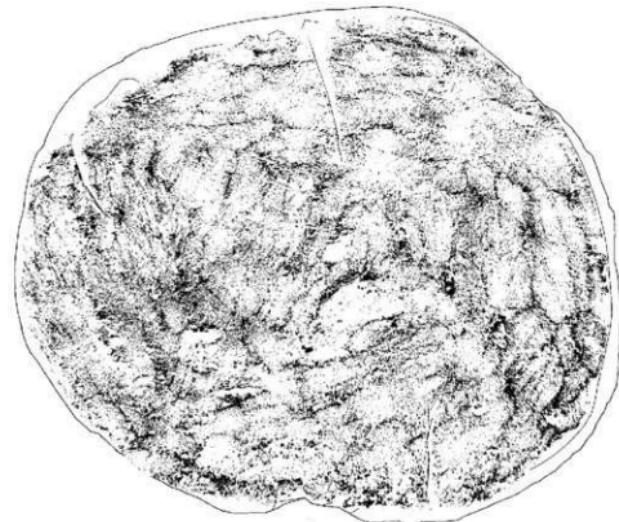
測る。3～8は板片で、4に残る弧状の端部から、曲げ物の底板とみられる。

以下、16・17・22は旧河川SD01上面の堆みに堆積した層（4・5層）に伴う遺物で、12世紀中頃前後の一群である。

土師器 杯（16）底部は回転糸切り離しにより、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。器周（底部）1/4からの復元口径17.0cm、器高3.0cm、底径11.0cmを測る。

瓦器 梱（17）撥状に開く低い高台が貼り付けられている。瓦質に焼成され、灰白色を呈する。

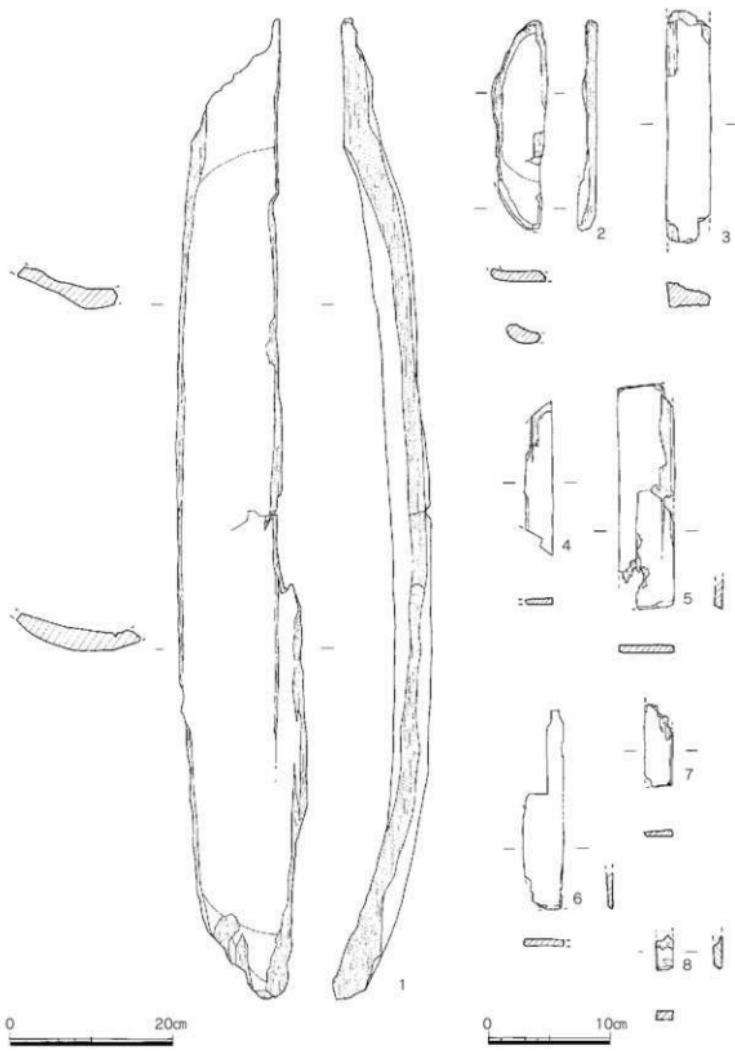
滑石製容器 蓋（22）笠形の被せ蓋で、平面形は不整梢円形を呈し、甲盛がある。天井・側縁部ともノミ痕が残り、境は稜をなす。下面是筒身の口縁を受けるため梢円形に削り込まれているが、粗成形されたままである。長径37.5cm、短径32cmを測る。口縁部の平坦面がすべて欠失しており、残存高12cmを測る。滑石片岩製で、三郡山地北側で産出した石材であろう。



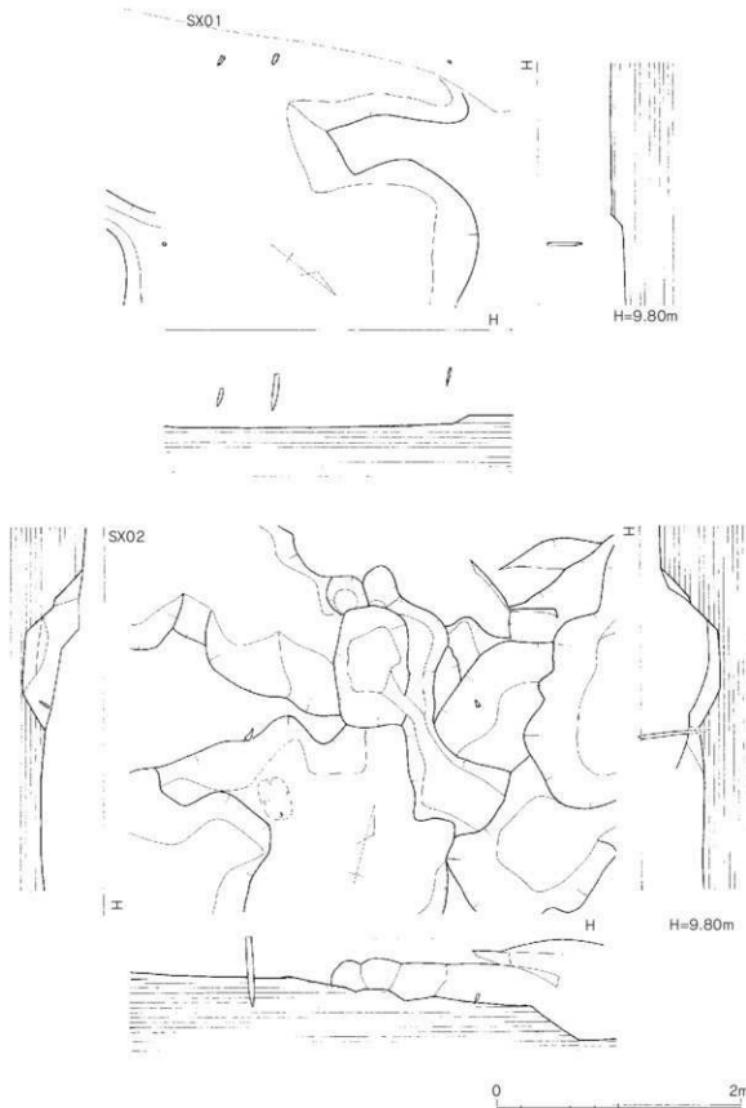
22

0 10cm

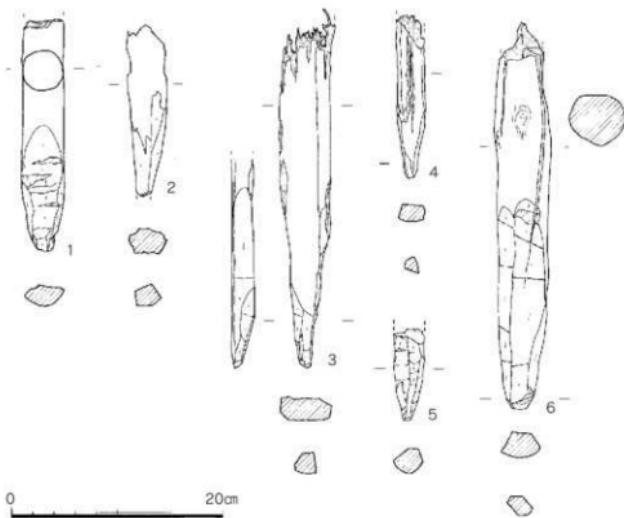
第7図 出土石製品実測図（縮尺1/3）



第8図 出土木製品実測図(1) (縮尺 1/4・1/6)



第9図 桁列・水口状遺構実測図（縮尺1/40）



第10図 出土木製品実測図(2) (縮尺1/3)

SX02 (第9図)

調査区の南西壁面に沿って検出された杭列である。N-30°-Wの方位を取る。川底付近に打ち込まれているが、川岸に近い杭の先端はやや高い位置にある。南東2本の杭の間隔が0.4m、北西1本との間隔は1.4mを測り、北西の杭と間隔が広くなっている。南東隅と北西の杭は先端から15cm残るのみであるが、他の2本は30cm前後の残存長である。杭列の東1.6mの位置にも杭が打ち込まれているが、杭列との関係は不明である。

出土遺物(第10図)

木杭(1~4) 1は丸杭で、樹皮は残っていない。残存する長さ22.0cm、径3.9cmを測る。2は風化が著しいが、角杭か。残存する長さ16.2cm、径2.8~3.6cmを測る。3・4は角杭で、3の残存する長さ30.7cm、径2.1cm×4.8cm、4の残存する長さ15.4cm、径1.5cm×2.5cmを測る。

SX03 (第9図)

調査区の中央西岸、河川が南に曲がる部分で検出した水口状遺構である。台地の西から延びる崖みが河川肩にかかる部分に、南向きに長さ0.95m、開口部0.5m、深さ0.85mの掘り込みをつくり、その前面に杭を打ち込んでいる。杭は開口部西側と東側に1本ずつ打ち込まれ、西側杭の頭部は台地面の高さまで残り、ほぼ垂直に打ち込まれている。東側杭は先端を残すだけであるが、先端の標高は西側杭とほぼ同じである。

出土遺物(第10図)

木杭(5·6) いずれも丸杭で、丸木先端の一部を削り残している。樹皮は残っていない。SX03の西側に打たれた5の残存する長さ18.7cm、径2.9cm、東側に打たれた6の残存する長さ36.8cm、径5.3cmを測る。

IV 調査のまとめ

香椎地区では現在までに、香椎A遺跡で7次、香椎B遺跡で8次、坂堤遺跡で2次にわたって発掘調査が行われている（註1）。香椎A・B両遺跡では中世を中心とした居館、墳墓、B遺跡では山城（御飯ノ山）などが検出されている。

坂堤遺跡第2次調査では旧河川SD01上面の窪みに堆積した層で12世紀中頃を前後する遺物や縄文時代にさかのぼる石器が少量出土しているが、旧河川SD01から出土した遺物の大半は6世紀後半から7世紀末にかけての遺物である。北側の上流側に位置する第1次調査で検出された遺構と直接のつながりはないといわれるが、遺物の出土量は第1次調査に比べ少ない遺物量ながら6世紀後半の土器の比率がやや高い。また、第1次調査で出土した8世紀代の土器は見られなかった。300m南南西の位置で調査された香椎A遺跡第6次調査では5世紀代の土器が多く出土しており、集落は時代が下るとともに上流域へと移動している傾向を窺うことができる。

旧河川の他に、杭列SX02、水口状遺構SX03も旧河川に伴うほぼ7世紀後半～末の水利施設とみられる。谷部の水田へ水を引くために造営されたものであろう。第1次調査で検出されたピット列や土坑は検出されなかった。

旧河川から出土した遺物は集落からの流れ込みであろうが、磨耗が少ないとから集落は本調査地からさほど離れていないところに位置していたとみられる。明治30年代の古地形図を見ると、立花山から延びた丘陵にはさまれた谷部には溜池が築かれていた。現在でも坂堤遺跡の北西150mに坂堤、狹隘な丘陵をはさんだ西300mには浜男堤が残っている。丘陵は幅200m前後に比高差10m以上で、やせ尾根状を呈する。現在、坂堤が位置する谷部の南東に延びる丘陵南側の緩斜面に香椎E遺跡、さらに南側の丘陵の広い範囲には香椎A遺跡が周知の遺跡として登録されている。坂堤遺跡第1次調査南西端で検出されたピット列や土坑を集落の外れとすれば、集落の中心は浜男堤との間に延びる丘陵南側と考えられるが、近代以降の開発により大きく改変を受けた現況から遺存の可能性は極めて低い。

特筆される遺物としてSD01上面の窪みに堆積した層から出土した滑石製容器蓋の粗製品を挙げることができる。坂堤・香椎A遺跡では、他にも純粹な滑石ではないが滑石を主成分とする滑石片岩を加工した製品が散見された。近辺で採取、製作されたものであろうが、古代末以降の同様な石材を切り出した製作跡は柏屋郡内では多々良川右岸に位置する篠栗町南蔵院、久山町首羅山の石鍋製作跡が知られ、八木山付近でも所在が確認されていたが現在は消滅している。良質な西彼杵産の石鍋のように全国的に広域流通したものではなく、多々良川の水運によって限られた狭い範囲に流通したものであろう。坂堤出土の滑石製容器蓋は肉厚で、西彼杵産を含めても集落や都市遺跡から出土するものではない。類例としては経筒の外容器に用いられたものに求めることができる。香椎では「承暦三年（1079）一月二七日 香椎宮惣大檢校僧遍祐が經を埋納する」旨の銘が刻まれた銅製経筒が出土している。学術的に発掘調査された資料ではないので正確な出土地は不明である。坂堤出土の滑石製容器蓋についても、日常雑器とするより香椎宮周辺で造営された経塚に伴うものであった可能性が大きい。丘陵部に造営された経塚に埋納されていたが、土砂崩れや盗掘などによって破壊され、旧河川上面の窪みに落ち込んだものではないかと考えている。

註1 調査報告書は以下の通り刊行されている。

香椎 A 遺跡

- 「香椎 A 遺跡第1次」『蒲田・水ヶ元遺跡』
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 491 集 1996
- 「香椎 A」
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 317 集 1993
- 「香椎 A 遺跡2－香椎 A 遺跡群第3次発掘調査概要－」
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 622 集 2000
- 「香椎 A 遺跡3－一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査2－」
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1072 集 2010
- 香椎 B 遺跡
- 「香椎 B 遺跡－香椎住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 621 集 2000
- 板堤遺跡
- 「板堤1－一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査1－」
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1030 集 2009

引用・参考文献

- 竹内理三・「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 40 福岡県』角川書店 1988
- 川添昭二監修 重松敏彦編『大宰府古代史年表』吉川弘文館 2007
- 坂本太郎 他校注『日本書紀 上』日本古典文学大系 岩波書店 1967
- 佐佐木信綱編『新訂 新訓 万葉集 上巻』岩波書店 1927
- 直木孝次郎 他訳注『続日本紀2』東洋文庫 489 平凡社 1988
- 黒板勝美 他編『新訂増補 国史大系 延喜式 中篇』吉川弘文館 1937
- 吉村靖徳・黒瀬茂文『福岡県篠栗町南蔵院の滑石製石鍋製作所跡』『古文化談叢』第 50 集（中）九州古文化研究会 2003
- 久山町白山遺跡調査指導委員会・久山町教育委員会編『首羅山遺跡－福岡平野周縁の山岳寺院－』2008
- 保坂三郎『経塚論考』中央公論美術出版 1971



1 調査区北西全景
(北東から)

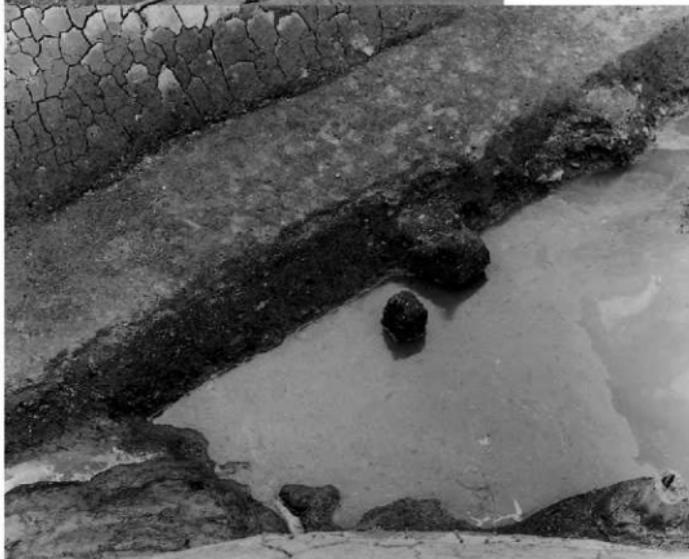


2 調査区中央全景 (北東から)

図版 2



1 調査区南東全景
(北東から)



2 SX02 (東から)



2 SX02 木杭 2 (南から)



4 SX02 木杭 4 (南から)



1 SX02 木杭 1 (南から)



3 SX02 木杭 3 (南から)

図版 4





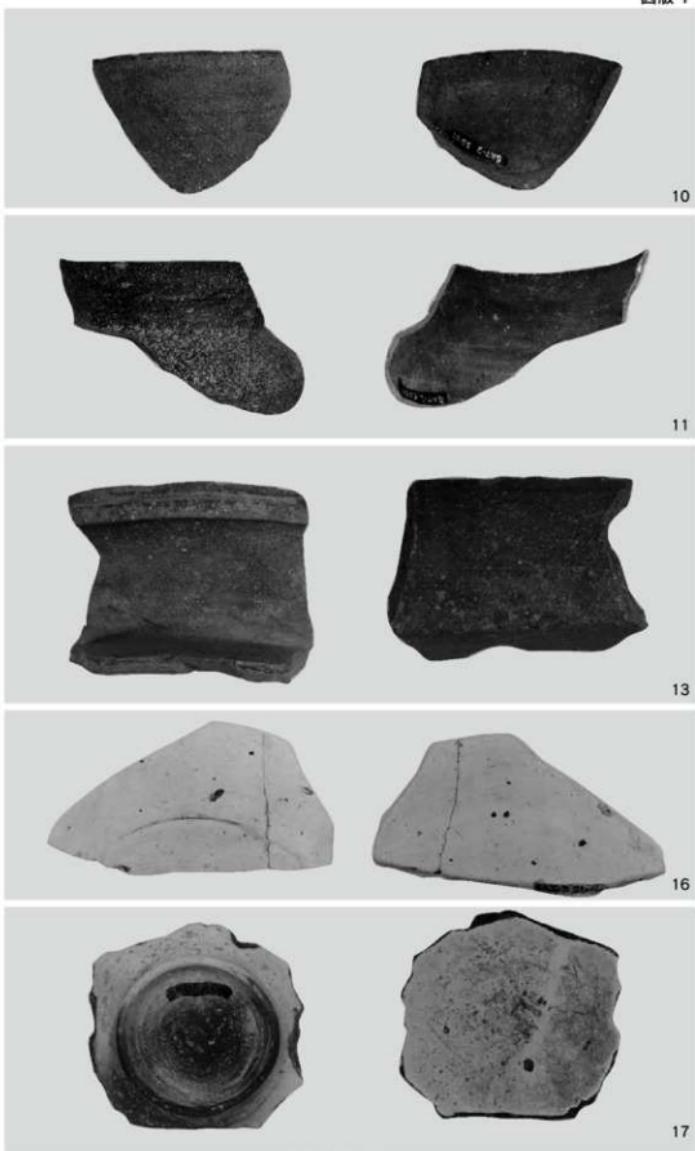
香椎地区空中写真 1948/01/09, 高度 2438m より米軍撮影 (撮影縮尺 1:15958)

図版 6



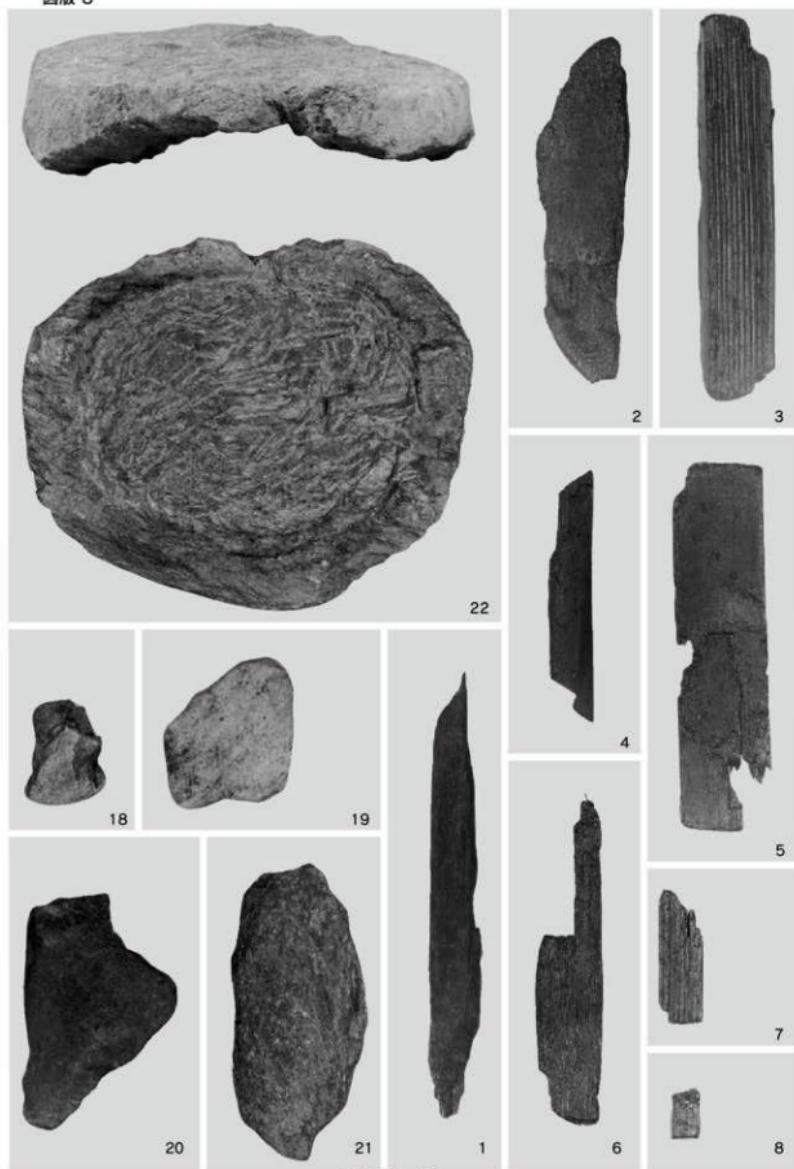
出土遺物 (1)

図版 7



出土遺物 (2)

図版 8



出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな 書名	さかつみに 坂堤 2						
副書名	一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査3						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1114集						
編著者名	佐藤一郎						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2011年(平成23年)3月18日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
坂堤遺跡 (第2次調査)	福岡市東区香椎駅東 1丁目地内	40130	33°39'37"	130°27'27"	090416 ~ 090715	536m ²	記録保存
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
坂堤遺跡	集落	7世紀、中世	古河川	須恵器、土師器、 石製品	滑石製容器蓋		
要約	坂堤遺跡第2次調査では旧河川、杭列、水口状遺構を検出した。旧河川上面の堆みに堆積した層で12世紀中頃を前後する遺物や羅文時代にさかのぼる石器が少量出土しているが、旧河川から出土した遺物の大半は6世紀後半から7世紀末にかけての遺物で、遺構の時期は7世紀後半～末とみられる。特筆される遺物としてSD01上面の堆みに堆積した層から出土した滑石製容器蓋の粗製品を挙げられる。滑石片岩を加工した製品で、近辺で採取、製作されたものであろう。容器蓋は肉厚で、経縄の外容器に用いられ、香椎宮周辺で造営された経塚に伴うものであった可能性が大きい。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1114集

坂堤 2

一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査3

2011年3月18日 発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 エージェント
福岡市中央区高砂1丁目20番2号